

琉球大学学術リポジトリ

米作 日本一と沖縄一 (2) ー稔実歩合を高めようー

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-06-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 新城, 長有 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/20395

米作

日本一と沖縄一

2

— 稔実歩合を高めよう —

一般には、稔実歩合が90%以上の場合を良、80—90%を中、80%以下を不良とみなしているが、大城さんの場合は稔実不良（75%）で、これが低収の直接の原因とみられます。同氏の全刈調査に立ち合うことが出来なかつたので、標本による分析が出来ないのは残念なことです。しかし、そのシイナは次の二つの内のいずれかであるか、又は両方であると思しますので、その調査方法や予防法を簡単に申し上げます。

稔実歩合の低いのが低収の直接の原因になっていると見られる場合には、まずその原因が不受精もみが多いことによるものか、又は屑米の多いことによるものか、明らかにしなくてはなりません。一般には不受精もみの比率はきわめて小さく、屑米の多少が稔実歩合の良否を決定づける場合がいちじるしく多いのです。もし診断の結果、不受精もみの多い場合には、その発生を防止しうるような対策が必要です。

不受精粳について

不受精もみの発生は、幼穂形成期（出穂前30日ごろ）から出穂開花期にかけての旱害、冠水害、高温害、塩害及び台風害等の災害にもとづく生殖器官の障害に起因しています。

それで不受精もみの多い場合には、この年の稲作を顧りみることによつて以上のうちのどの原因によるものかおのずから思い当ります。

以上の諸要因の中には偶発的なものも多く、人力ではどうにも出来ない面もありますが、ある場合には栽培法の改善のみによつても、不受精もみの発生を少なくすることが出来ます。例えば、高温のために不受精もみが発生するところでは、冷水の掛流しによつて、温度の上昇を防止し、その被害を軽減させることが出来ます。

不受精粳と屑米の鑑別法

鑑別しようとする材料を温湯に12時間位つけ、ヨードカリ1gと0.3のヨードを水200CC中にとかし、その中へ上記の材料を入れて1日位放置する。その後アルコールで数分洗えばもみ殻に付着したヨードがとれて、もみ殻の外からもみ殻内部の染色の有無が識別出来る。もみ殻内部が黒色に染つているもみはすべて屑米であり、不受精もみは全然染らない。

屑米について

屑米の多少を支配する要因にはいくつかありますが、これらの中で最も大きな影響をもつものは、着生もみの多少と、出穂後の同化量の多少であります。特に着生もみ数の過剰が屑米を増加させ、稔実歩合を低下させている場合はなほだ多い点を重視しなければなりません。

各地をまわつてみますと、生育の初期に多大の肥料を入れて、無計画に稲を大きくするのに専念し、草色や草立をみてよるこんでいる農民がはられますが、肥料が速効性のため出穂期ごろまでには肥料切れとなり、稔実すべきもみが屑米になつていように思えます。

それを解決するためには、施肥の適正化を固める必要があります。それを知る一二の方法を申し上げますと、本田に定植した時より2、3株について主かんの出葉期を記録します。施肥が適当なら規則正しく次から次へと出葉しますが、それが乱れたときは、施肥を中心にしての管理がまずかつた証左にもなります。

第2の方法は、出穂2、3週間前に稲の若葉をとり、その汁をしぼつてアスパラギンの有無を調べることです。

（9ページにつづく）

とあつさりあきらめないで、青でも緑に近いものもあれば灰色に近いものもあるから」といつて居られます。

私達が色を選ぶ場合にはなんといつても主観性が働いて特定の色に対してすぐ「好き」「嫌い」と表現するのですが、色の好みはどのような要素が関係しているかを簡単にまとめてみます。

- 1) 年令—使えば年令層によつて和服の色が派手から地味へと段階づけられていた長年の日本独特の衣服生活の影響で、子供は派手な色、年輩の方は地味な色と年令的に使う色を決めてしまうこと。
- 2) 境—外国人の好む色は沖縄人には必ずしも好まれないかもしれないし、又沖縄人の好む色を外国人は好まないかもしれない。即ち国情・気候風土・風俗の相違により特定の色に対する好みが変わってくるから他人に自分の嗜好を強いる事はできない。
- 3) 節—四季の変化に伴つて色に対する好みが変わってくるし時と場所によつても色の選択が左右される
- 4) 流—流行色をまねることによつて色の好みが変わることが考えられます。これは自分と他人を同一視する「同一化心理」といわれ皆がしている事に一種の安心感をもてる為である。

その他に色の好みに関係する事で色の「珍らしさ」という事があります。たとえばあまりみられない色は私達に新鮮な感じを与え、感情に対する刺戟き力をもつものであると思います。

以上は色の好みに影響するいくつかの要素をあげましたか色の好みは単一の色彩をみているときとそれが他の

色と取り合わせられたときの好みの問題と二つの場合があります。配色は色相の関係だけから一方的に評価されるような単純なものではありません。私はある特定の色の組み合わせが好ましか好ましくなくかは次のような条件を基にして評価されるべきであると思います。即ち、

- (1) どのような色と組合わされているか。
- (2) 各々の色の分量はどうなつているか。
- (3) その配色がどういつた場所で使われるのか。
- (4) どういつた時の配色なのか。
- (5) 長時間なのか短時間使われるのか。
- (6) 色が施されている材質感の及ぼす影響はどうかという事になります。

配色の一例を色相赤にとりますと、赤といつてもベビーピンクのようなかなり白が入つたものからエンヂのような灰色又は黒のみを赤に混ぜた無数の色がみられますか黒のドレスに鮮明な赤い色を少量アクセントに用いればピリットした良い配色をつくる事ができます。又赤い色のドレスにしても生地材質感いかんによつては重々しい豪華な感じになり不断着としてひんぱんにしかも長時間着るには不適當でも、稀に着る冬の夜会服としては申し分ないかもしれません。

このように色そのものはもともと観念的なものではありませんか形や質の裏づけによつて、はじめて具体的なものとなりますから色を上手に使いこなすには食わず嫌ではなく実物に即して自由な広い立場で体験するのがはやみちだと思います。

(比嘉 美佐子)

米作日本一と沖縄一のつづき

その方法は農業及び園芸の35巻9号に出ていますからごらん下さい。方法が簡単なので、すぐ分析が出来ると思っています。

分析の結果アスパラギン存在が確であればN質肥料が充分にあることを示し、それがない場合は、穂肥をやる必要があります。

上記したように、出穂前においては着生もみの適正化を図ることか稔実歩合を高める上の重要な対策となり、出穂後においては同比重をいかにして増大させるかか稔実歩合向上の鍵となります。

このためには、強健な稲体で出穂期を迎えさせること、穂揃期の窒素肥料の追肥、出穂後の病虫害防除、台風害の対策、倒伏及び秋落ちの防止等が必要です。特に穂揃期の追肥は、これによつて着生もみ数が過剰であつても悪影響がかなり軽減される場合が少なくありません。

ようするに沖縄一に出品するにしても、一躍5割や10割の増収をねらうのではなく、従来安全に収穫出来た2—3割増のところをまず一応の目標とし、年を追うて目標を高めて行くべきです。

(新城 長有)